

ったが、治療により軽快した群、C群：治療前から異常であり、治療後も異常のままの群、D群：治療後悪化した群の4群に分類した。検討した症例は84例で、1) 術後照射例43例ではA群18例、B群15例、C群7例、D群2例であり、うちRa治療施行した例は、A群1例、B群5例、C群11例、D群0例であった。2) 照射治療単独例35例では全例Ra治療を施行しており、A群12例、B群8例、C群12例、D群3例であり、Ra治療のみの1例はA群であった。3) 断端癌照射例6例では、A群2例、B群1例、C群2例、D群1例であり、うちRa治療を施行した4例では、A群2例、B群1例、C群0例、D群1例であった。

#### 17. サイロキシン結合グロブリンラジオイムノアッセイキットの基礎的、臨床的検討

小泉 潔 伊藤 廣  
立野 育郎

(国立金沢病院・放科)

サイロキシン結合グロブリンのラジオイムノアッセイキットを入手し使用する機会を得た。このキットはB-F分離にPEGを用いたキットであり、必要血清量は20  $\mu$ lである。インキュベーション条件の検討では、時間が一定の時は温度の低い方が、温度が一定の時は時間の長い方が結合率は高かった。キット内再現性の平均変動係数は4.9%、キット間再現性の平均変動係数は8.3%と良好であった。回収率試験では予測値に対する測定値の割合は118%であった。希釈試験では倍数希釈によりほぼ直線的に測定値の減少を示した。

健常者23例での平均値および標準偏差は、22.8  $\pm$  3.3  $\mu$ g/mlであり正常範囲に2SDをとれば16.2  $\sim$  29.4  $\mu$ g/mlとなった。機能亢進症は有意に低い低下症とは有意差はみられなかった。レゾマットT<sub>4</sub>値とTBG値との比でみると、健常者では3.52  $\pm$  0.96、範囲は1.60  $\sim$  5.44となる。機能亢進症では有意に高く低下症は有意に低かった。健常者を含め治療の有無をとわない甲状腺疾患患者92例

でのT<sub>4</sub>/TBG値とfree thyroxine index(トリオソルブ×レゾマットT<sub>4</sub>/100)との相関係数はr=0.960であった。症例としてTBG増加症を伴った甲状腺機能亢進症、TBG減少症を伴った甲状腺機能亢進症、妊娠を伴った慢性甲状腺炎を呈示したが、これらの症例ではトリオソルブ値とT<sub>4</sub>値の解釈の上でTBG直接測定は非常に有用であった。

#### 18. Triobead-125の基礎的、臨床的検討

嶋津 秀樹

(徳島大・放)

分校 久志 亀井 哲也

久田 欣一

(金沢大・核)

Triobead-125 T<sub>3</sub> Uptake Kitは血清中のthyroxine binding globulinの飽和度を間接的に求めることによって、甲状腺機能の定量的測定を行なおうとするものである。

同キットは、<sup>125</sup>I-Liothyronine Reagent Solution、活性炭でコーティングしたbeadの入っているAssay tube、およびControl Serumよりなり、インキュベーションにてfreeのliothyronineがbeadに付着することを利用したキットである。またControl Serumにより、アッセイ中の温度や時間の影響を少なくすることができる。

実験の結果、インキュベーション時間に対する安定性は非常にすぐれており、10分、20分、40分、60分でほとんどT<sub>3</sub>B値に変化は認めなかった。5種類のT<sub>3</sub>B値の異なる血清を用いた再現性の試験においても、変異係数の平均値は5.1%と良好な再現性を示した。

83検体についてのTriosorb値との比較では、相関係数は0.91とよい相関を示し、回帰直線はy=0.665x+8.9でy=xとはTriosorb値25%付近で交わった。

100例の正常甲状腺機能者の平均値は、27.3、S.D.は $\pm$ 3.07で、正常範囲を21  $\sim$  33.5%とすると、機能亢進症との間にはよい分離を認めた。

Triobead-125 T<sub>3</sub> Uptake Kitは操作が簡単で、温